



囚われの野獣

開始条件: レベル5のビースト・タイラント

目的: 敵の全滅

序幕:

夜のほとんども、グルームヘイヴンの防壁外で過ごした。木々や獣たちと共にいるほうが、安心できる。街には制限が多く、それにひどく臭い。

真夜中、狼の遠吠えによって目が覚めた。ただの遠吠えではない、あの狼は苦しんでいる。戦熊を呼び、助けを求める声へと突っ走らせる。

「そこまで!」その搜索は、他のヴァームリングによって遮られた。立ち止まり、暗黒の奥を覗きこむと、開けた場所の端に、さまざまな動物の影が見えた。その暗闇より、一体の女ヴァームリングが出てきた。

「原野はオマエを、裏切り者と断じた。そしてワタシは、オマエの処刑係となった」異議を申し立てたが、その女ヴァームリングは大声をあげた。「オマエはその力で、害毒をばら撒くあの街を滅ぼすどころか、助けてきたではないか。街は大地の傷だ。癒さねばならない!」

オマエの言動は、自然の力を扱うに値しない。つまりオマエはここで、死罪に処されるのだ! 彼女が杖をかざすと、地面が裂け、君は落ちていった。

強く打ちつけられた。落ちた先では、地下洞穴が月光に照らされていた。土砂の中に、熊は見当たらない。近くにいるのは感じられる。だがしばらくは、ひとりで何とかしなければならない。さらにこの洞穴に、他の猛獣がいるという事実が、困難に拍車をかけた。この猛獣たちは、どうも友好的ではなさそうだ。

特別ルール:

戦熊を、隣接ヘクスには召喚してはいけません。ビースト・タイラントを左の開始位置 に、戦熊を右の開始位置 に配置してください。このシナリオの障害物は、通り抜けできません (ジャンプ でも飛行 でも)。〈惑わしの咆哮〉の下段ボックスは実行できません。

敵ヴァームリングの言葉が、脳裏で繰り返された。だが、とうてい信じることなどできない。仮に信じたとしても、抵抗することには変わりはない。闇のなかへとさらに進んでいく。

特別ルール:

扉 a を即座に開く。

使用する地形タイル:

D2b
B4b
G2a
N1a
E1b



🐾：囚われの野獣

2

この牢獄から脱出するために、獣の命を奪うことを強制されていること自体に、怒りがこみあげてくる。こんな狂気が、原野の意志のほうではない。傭兵として活動してはいたものの、常に原野への献身を第一に行動してきた。あの悪逆のヴァームリングを捕まえ、その嘘の代償を支払わせてやる。

特別ルール：

扉 **b** を即座に開く。

3

目の前に光が広がった。この洞穴牢獄らの出口だ。しかしそこに、憤怒に震える者もいた。君をここに送りこんだヴァームリング本人である。

「力に見放されたというのに、ワタシの可愛い獣たちを直し、ワタシと対峙するだけの根性はあるみたいね。無駄な努力だけだ」

この嘘吐きに言いたいことは沢山あるが、君の喉からは、原野のすべての力を伴った原始的な咆哮が出て来た。相手の目にはありありと恐怖が浮かぶ。君は戦熊と共に突撃を敢行した。

特別ルール：

扉 **c** を即座に開く。

終幕：

悪逆ヴァームリングの死体を踏みつけ、唾を吐きかけた。君が原野の力に見放されていないのは明白であり、それを証明できたのだ。彼女が使っていた杖を奪い、遺体は放置する。その骸は大地の糧となり、時と共に新たな命を育むであろう。

報酬：

アイテム 150 番〈強制の杖〉



執筆&シナリオデザイン：アイザック・チルドレス

グラフィックデザイン：ジョシュ・マクダウェル&アイザック・チルドレス

アート：アレハンドロ・エリチェフ、アルヴァロ・ネボット、ジョシュ・マクダウェル

編集：マシュー・G・サマーズ

スペシャルサンクス：全シナリオのテストプレイをするぼくに付きあってくれた、クリスティン・チルドレスに